

宮城いきいき
シニア
だより

県内にお住まいの
元気シニアを紹介
します！

孤立した人々の絆作りと 住みやすい地域社会作りへの 貢献を

NPO法人 心のつぼみの会理事長 菅原 民四郎
(宮城いきいき学園大崎校17期生)



「地域の多くの人々が、生きるために何をすればいいのかわかり、共に考えていこう」という主旨から、平成24年5月1日に設立したのが「心のつぼみの会」です。

私は、宮城いきいき学園大崎校17期の卒業生です。現在64歳、あと少しで高齢者の仲間入りです。平成19年12月に障害者となり仕事ができなくなりました。今後、生きていくために何をすればいいかと考えた時、人々のために活動ができる、ボランティアがあるのではないかという思いに至りました。そして、ボランティア活動をするために、仙台に3年間通い、数多くの知識を習得しました。この3年間の勉強が現在のボランティア活動の基本になっています。



「心のつぼみの会」が取り組む、自死の問題は地域の人々が生きていく上で避けて通ることのできない重大な問題です。私たちは、大崎地区で自死問題を前向きに取り上げた、民間では初めてのボランティアグループです。現在各新聞などでも取り上げられていますが、依然として日本国内で毎年約3万人の方々が自死をしています。特に東北地方では多く、宮城県も常にワースト順位に入っており、最悪の事態ではないかと感じられます。

平成23年3月11日の東日本大震災では、地域の文化が大津波によりすべて流されてしまいました。流されてしまった光景は、生きている人々の心の中に残っています。大きな被害に見舞われた被災者の方が、震災前の生活水準に戻るには大変な時間と労力がかかるでしょう。では、心の中に震災で負った傷を持ちながら、再建の途中で挫折した人々はどうなったのでしょうか。最終的には自死を選ばざるを得なかった人もいたでしょう。震災の影響が少なかった内陸部とて基本的には同じです。なぜ人々は自死の選択をしてしまうのでしょうか。私たち「心のつぼみの会」はこの問題に正面から取り組み始めました。

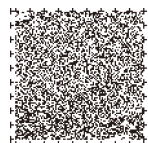
現在、「自死とは何か」から考え始めることを基本とし、「傾聴」の姿勢を大切にしています。また自死を地域の課題として取り組むため、さまざまな講演を聞いたり、他の地域で自死問題に取り組んでおられるNPO団体と連携を取りながら勉強をしています。

いまはボランティアという立場で、地域の人々と一緒に、生きるためにはどうしたらいいかを考え、大崎地区全体の自死の問題に取り組んでいます。これが、私の生きがいであり、社会に貢献できる活動だと考えています。

私たち大崎地区における「心のつぼみの会」の主旨や活動に賛同し、一緒に活動をして下さる方がいましたら、一緒にボランティア活動を行ってみませんか。ご連絡を心待ちにしています。



問い合わせ
NPO法人「心のつぼみの会」
TEL 0229 (72) 1457 FAX 0229 (72) 5081



ちいきを つ・な・ぐ

みやぎボランティア総合センターからボランティア活動や防災活動、福祉教育などさまざまな情報を発信します。

ボランティア活動の経験を これからの大崎へ

津波によって被災した地域の力になりたいと、宮城県古川高等学校(大崎市、生徒705人)の2年生が5月21日、東日本大震災の被災地沿岸部を訪れ、ボランティア活動などを行いました。生徒の6割は被災地を訪れたことがなく、被災のために役立ちたいとの要望により行われた今回の体験活動と同校の取り組みを紹介します。

生徒みずから活動調整

今回の活動にあたっては古川高校の生徒がクラスごとに気仙沼市、石巻市、亶理町を訪問しました。

気仙沼市での活動に参加した生徒は一般社団法人気仙沼市復興協会から被災状況の説明を受け、被災した田んぼの復旧ボランティア活動に取り組みました。また、亶理町での被災農家の除草手伝いや石巻市の被災商業地域の見学については生徒自身が調整するなどして活動につなげたものでした。

震災直後、生徒たちは被災地に運動靴やジャージを送る活動を積極的に企画し、実施。「卒業後も継続して復興支援活動に取り組む先輩方に刺



▲忘れかけていた記憶が鮮明に思い出されました

激され、自主的なボランティア活動につながったのでは」と鈴木校長は話されていました。卒業生の活動は、周辺の高校へも広がっています。

活動を通じて得た想い

炎天下で行われた気仙沼市の活動では、津波でガレキなどが堆積し、稲作ができなくなった田んぼをスコップやくわを使い、小石などを取り除く作業が行われました。

ボランティア活動に参加した生徒の9割以上が「行って良かった」と、その後のアンケートで回答。また、活動後の報告では「被災地を実際に見て、予想以上に被害が大きかったことに驚き、復興にはまだまだ時間がかかると思いました」、「現地の方々の元気で明るい姿を見て、震災に負けずにひたむきに頑張っていることに感動しました」、「作業は大変でしたが、少しでも被災地の力になれたら」など、被災者と関わり、そして生の声に耳を傾けたことで得られた感想が聞かれています。

代替行事から恒例行事へ

この体験活動は恒例の船形山登山が中止になった代替行事として行われました。「来年の活動については、生徒自身で決めること」としながらも、「ボランティア活動を糧に日々の勉学、部活に力を注いで欲しい」、「生



▲ボランティア活動の様子



徒一人一人がこの地域にとってかけがえない存在、災害時の力になることを願っています」と鈴木校長は話されていました。

このような若い世代の取り組みが宮城県内外のさまざまなボランティア活動に波及し、これからの地域づくりの力になることを期待しています。

